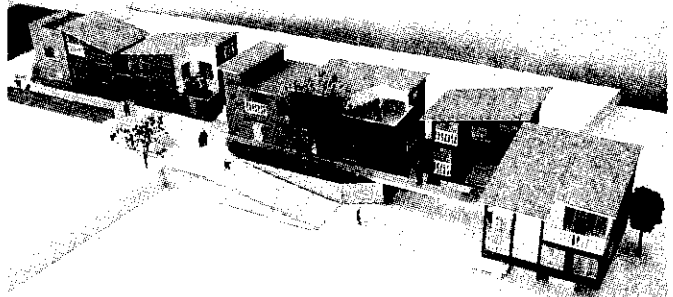


“現代版長屋”

コーポラティブハウス

岡山市中納言町に計画された集合住宅「コーポラティブハウス」の建設が実現へ動き出した。家を持ちたい人が集まり、共同で建てる住まいづくりの方式で、岡山県内では珍しい。隣近所の地縁が薄れる中、親密な人間関係が特徴だ。(中浜隆宏)



岡山市中納言町で着工したコーポラティブハウスの完成予想模型

コーポラティブは「協同」などの意味。住む人が組合をつくり、土地を買い建設、管理する。「現代版長屋」とも呼ばれる。

計画では約九百五十平方メートルの敷地に、民家六戸と事務所一戸を建てる。それぞれ木造二階か、同一階、地下一階建てで、広さは五十〜百三十六平方メートル。二、三戸ずつ棟続きで、外壁、屋根材をそろえ景観を統一する。

参加する六家族がそろい四月中旬、起工式を行った。十月に完成する予定。分

岡山で着工・実現へ

譲マンションと同じ区分所有の形態で、建物は各住民の専有、土地は共有となる。一戸ごとに売却、賃貸することもできる。

敷地を所有する石井信さん(左)と市内山下区が代表を務める不動産会社が企画コーディネーターとなり、参加者を昨夏から募集。年末に決定後、それぞれの希望を聞き、各戸を設計していた。石井さん自身も入居する。

その間、参加者はたびたび集まり交流。起工式後も食事を開いた。「建設前

魅力は親密な人間関係

土地有効利用 工事費も割安



コーポラティブハウスのシンボルツリーとなるエノキの前で起工式を行う計画参加者ら(4月12日、岡山市中納言町)

から近所付き合いが始まり、コミュニケーションとして「一体感がある」と、参加した会社員深水俊英さん(左)も「同市小橋町。全戸を同時施工することで工事費を節約でき」「ローコストなのも魅力」と言う。中納言町地区は市街地に近い、江戸時代から続く町だけに宅地が入り組んでいて、今回の敷地も道路と接する間口が十メートルほど細いが、「分割せず一体的に開発するコーポラティブハウス。市街地にき

イブ方式なら通路など無駄なスペースが生まれにくく、使い勝手の悪い土地も有効活用できる」と石井さん。「区分所有への抵抗感さえ乗り越えられれば、古い町の空き地をよみがえらせる方法として有効」と語る。

戸建てでもマンションでもなく、住む人がともに暮らすをはぐくむコーポラティブハウス。市街地にき

わいと人のつながりを呼び戻す策として注目される。